



Japanese Association of Science & Technology Journalists

JASTJ NEWS

22世紀社会への夢

林 勝彦

「来年の事を言えば鬼が笑う」と言われるが、ハンガリー生れのピアニストF・リストは「未来という無限の王国に向けて、できるだけ遠くに槍を投げる事だ」と言った。ひと足早いお屠蘇気分で槍を投げてみたい。

温故知新。20世紀の人は21世紀をどう見たか？1901年元旦、報知新聞は「二十世紀の豫言」を書いた。23項目中当たりは国際電話、エアコン、車、7日間で女性も世界漫遊。外れはサハラ砂漠の肥沃化、アフリカが先進文明國、幼稚園の廃止、人獣会話などがある。

1970年代、科技厅は専門家に30年後の予測を聞いた。原子力コンビナート、高速増殖炉、脳死移植欧米化などは外れ、的中率は20~30%であった。では20世紀の実相はどうであったのか？2点あげてみると①「科学技術の世紀」。人類は初めて月面着陸し「Only One Earth」を実感した。大量生産は人々の生活を豊かにし、マスメディアも産んだ。反面、「国連人間環境会議」「成長の限界」「沈黙の春」等が負の側面を警告した。②2つの世界大戦などから「戦争の世紀」とも言えよう。戦争はABC兵器を産み大量虐殺に使われた。原爆の父、J・R・オッペンハイマーは「我は死神なり、世界の破壊者なり」を引用し、水爆開発を拒否した。しかし、科学技術の暴走は止まらなかった。21世紀に入り再生医学、ROBT、デジタル化などが進んだが、新たな危険も加わった。9.11「テロの脅威」、3.11「原発震災」等の悪夢である。

お屠蘇気分も醒めてくるが22世紀社会への夢を楽

観的に列挙してみる。①A・アインシュタインを凌ぐ天才の出現で「宇宙統一場の理論」完成。②大宇宙で地球外生命体を確認。③DNAチップ等で個人別の予防医学が主流。余分なCT被曝や薬剤依存にサヨナラし5大成人病、認知症なども激減。④LOHAS的ライフスタイル(健康志向、無添加自然食品、持続可能な環境と精神性重視)の実践者が先進国で激増。⑤ELSIな尊厳死・遺伝子治療・デザイナーチャイルドが増加。⑥宇宙発電などで100%自然エネルギーの自治体が激増。ローマ法皇の発言「原発は現代のバベルの塔」通り原発大惨事がアジアで再発。⑦南北・難民・人口問題が改善。アフリカに集中する1日所得1\$未満の最貧国はゼロ。⑧国連常任理事国首脳が広島を訪問し核兵器廃絶決議案可決し核なき社会へ。⑨人類愛に基づく民主主義、平和教育、哲学が中露を含み世界的に普及。8K全天型映像教育も効果発揮。⑩IT紛争・テロは続くが、世界文化遺産や世界自然遺産に加え危機遺産リストの登録が急増。

ビッグバンから地球という名の小さな星が誕生し、生きとし生ける全ての「いのち」が芽生え見事な生態系を創った。地球自身が世界危機遺産になる悪夢を避けるため、22世紀の科学技術は「ブタペスト宣言」が示す様に「生態系」「倫理」「次世代」を重視し知識、平和、開発、社会に貢献すべきである。私はそれを「いのちの哲学」と呼びたい。

将来世代にツケを回す無責任極まりない科学技術からの脱出。せめてこの初夢が正夢になります様に！

(JASTJ理事)

CONTENTS

| | |
|--------------------------|---|
| 巻頭言 | 1 |
| 特集 科学ジャーナリスト賞の10年の歩み | 2 |
| インドネシア科学ジャーナリスト会議報告 | 4 |
| ベトナム科学ジャーナリスト会議報告 | 5 |
| 14年目の科学ジャーナリスト塾が始まる | 6 |
| 例会報告(9月) わが国の資源管理と課題について | 7 |

| | |
|------------------------------|----|
| 例会報告(10月) 子宮頸がんワクチン問題の現状 | 8 |
| 会員日より ノーベル賞受賞者・大村智さんのちょっといい話 | 9 |
| 会員日より カクタス・コミュニケーションズの新たな試み | 10 |
| オピニオン | 11 |
| WEB編集長から | 11 |
| 事務局日より | 12 |

科学ジャーナリスト賞10年 社会に定着

日本科学技術ジャーナリスト会議（JASTJ）が優れた科学報道を顕彰しようと「科学ジャーナリスト賞」を制定してから、速いもので10年の歳月が流れた。その足跡を振り返ってみると、受賞作品はどれも素晴らしく、日本の科学報道の優れた部分を確実に捉えており、科学ジャーナリスト賞の存在感を社会にしっかりと定着させたといえよう。この機会に10年の歩みをあらためてたどってみたい。

錚々たる選考委員のメンバー

JASTJで顕彰制度をつくろうと私が提案した理由は、簡単なことだった。歴史の浅い日本の科学報道を健全に育てていくためには、互いに批判し合い、切磋琢磨していくことも大事だが、「いいものはいい」と褒め合うことも大事だと考えたことである。

幸い多くの人たちの賛同を得てスタートすることになり、どんなコンセプトでやるか、みんな意見を出し合ったことがまたよかった。候補作品は自薦・他薦でできるだけ広く集めること、ジャーナリストだけでなく、優れた啓蒙書を書いた科学者なども対象にすること、賞は「大賞」を1本、「優秀賞」を数本とすること、時には「特別賞」も出すこと、などはすぐ決まったが、問題は選考委員だった。

顕彰制度が成功するかどうかは、選考委員に誰がなるかにかかっているとされる。そこで内部から5人、外部から5人と計10人という大型選考委員会を組織することになり、外部委員の人選に努めた結果、ノーベル賞受賞者の白川英樹氏、日本学術会議会長の黒川清氏、日本物理学会会長を務めた慶応大学名誉教授の米澤富美子氏、科学者としても名高いJST理事の北澤宏一氏、科学史の権威でICU教授の村上陽一郎氏という錚々たる方々の内諾を得た。

5年後に黒川氏と北澤氏が東大名誉教授の浅島誠

氏と総合科学技術会議議員の相澤益男氏に代わったが、この外部委員に素晴らしい人を得たことが、科学ジャーナリスト賞が成功した最大の要因だったと私は思っている。



表彰式で全体の講評をする白川英樹氏
(撮影 山本威一郎)

緊張した1回目の選考、あとは順調に

第1回の選考は最も緊張したが、それぞれ文句なしにすぐれた作品が選ばれ、順調な滑り出しとなった。大賞に選ばれた毎日新聞の元村有希子記者の「ブログを含む『理系白書』の報道」は、理系の人たちが日本の社会のなかでどんな位置を占めているかを、さまざまな角度から分析したもので、「日本の科学報道に新たな地平を開いた」といわれた。

優秀賞になったフリーカメラマン、中村梧郎氏の「ベトナム戦争の枯葉剤被害から30年余も目を離さない報道姿勢」も、「アスベストによる住民被害」に粘り強く取り組んだ朝日放送の石高健次

氏、毎日新聞編集委員の大島秀利氏も、それぞれジャーナリストとして素晴らしい仕事だった。

もう1件、優れた啓蒙書を書いた科学者として、青山学院大学教授の福岡伸一氏が優秀賞に選ばれた。「分子生物学者として斬新な視点で狂牛病を一般読者向けに分かりやすく解説した」というもので、その後、福岡氏がメデイの世界で大活躍し、一躍スターライターになったことは、科学ジャーナリスト賞の成果の一つとして嬉しいかぎりだった。

この第1回の受賞者の発表は、表彰式の場で突然発表するという方式をとり、新聞だけでなくテレビ



科学ジャーナリスト賞2015の受賞者たちと選考委員
(前列左から受賞者の添田、加藤、須田、山本、浅井、大石の各氏。後列左から選考委員の横山、柴田、白川、相澤、浅島、村上、室山の各氏) (撮影 山本威一郎)

まで報道してくれたという点では大成功だったが、かなり前に決定しているのに発表しないというのは、やはり無理があると、翌年からは決定してすぐに発表する方式に変えた。

感動的な表彰式、心打つ受賞者のあいさつ

表彰式は、毎回、外部選考委員からの優れた仕事を称え祝福する温かい言葉と、謙虚な姿勢のなかにも長年の努力がにじみ出る受賞者の心打つ挨拶があって、しみじみとした感動が伝わってくる催しとなっている。「ああ、科学ジャーナリスト賞をつくってよかったなあ」と、そのたびに私はつくづくそう思うのだ。

たとえば、第2回の大賞を受賞したNHKの村松秀氏の「論文捏造」に対して、選考委員の米澤富美子さんは「一読して頭をガンと叩かれた感じ。論文を載せた科学誌ネイチャーやサイエンスの責任まで厳しく追及しているところが素晴らしい」と称え、受賞者の村松秀氏は「科学界は成果主義に深く毒されていると感じた。関係者にとっては話したくないことだったろうが、取材に応じてくれたのは科学界を良くしようという熱意からだったと思う」と挨拶した。

米国で起こった論文捏造事件がこの大賞で日本の科学ジャーナリストに広く知れわたっていたことが、日本でSTAP細胞事件が起こったときの素早い確かな対応に生かされた、と私は思っている。そしてそれが、10回目の大賞、毎日新聞の須田桃子記者の「捏造の科学者 STAP細胞事件」につながって結実したと思いたい。

そう考えると、科学ジャーナリスト賞の意義がいっそう大きく見えてくるのだ。

表彰式では毎年、選考委員の白川英樹氏に全体の講評をお願いしている。白川氏の、ときに厳しい言葉をまじえながらの講評には、白川氏がこの科学ジャーナリスト賞をいかに大事なものだと考えてくださっているか、がにじみ出ているように思えて、頭の下がる思いがする。

異議申し立てが1件あったが…

科学ジャーナリスト賞が成功したといえる理由の一つは、選考に大きな誤りがなかったことだ。ノーベル賞の選考にもときに誤りがあるのだから、これだけでも大変なことだといえよう。ただ、1回だけ

選考結果に外部から異議の申し立てがあった。

2011年の第6回の大賞、NHKの「封印された原爆報告書」という番組に対して、長崎大学名誉教授の長瀧重信氏から「決して秘密にされたものではなく、当時、日本語の書物にもなっている」という抗議で、長瀧氏は放射線医学の重鎮であるだけに一瞬驚いた。

しかし、NHKでは「封印されたという表現は、やや強すぎたかもしれないが、当時、国内では米国への提供を急ぎ、日本の患者のためには利用されなかったのだから許容範囲内だ」としていることと、JASTJとしても「原爆の悲惨さを占領軍が日本国民にできるだけ知らせないようにしたことは事実であり、日本の原水爆禁止運動が9年後の第五福竜丸事件から始まったという客観的な事実もそれを証明している」として、大賞の選考を変える必要ないと判断したのである。

今後も科学ジャーナリスト賞が社会に存在感を示していくためには、選考を間違えないことが大切だ。この異議の申し立てを自戒のきっかけにしようと話し合った。

広がる対象分野への目配りがこれからの課題

科学ジャーナリスト賞をつくったときのコンセプトとして、科学館や博物館の展示なども対象にしようというものがあったのに、展示物は期間が過ぎると見られなくなるという点がわざわざしてか、なかなか選考に上がってこなかった。

そこで、第10回の2015年の選考で、「いい展示がある」と推薦があった段階で選考委員ができるだけ見に行くようにした結果、東京理科大学近代科学資料館の「科学雑誌～科学を伝えるとくみ」に特別賞を出した。

今後も展示物の授賞を見逃さないようにするため、選考委員が見てよかったものを展示期間中に連絡し合い、なるべく多くの選考委員が見たうえで、特別賞の枠を活用する方式を新たなにつくることにした。11回目から実施する。

第1回の候補作品は34件だったが、年々増えてきて第10回は96件になった。とはいえ、ウェブサイトや科学館の展示などまだまだ目の届かない分野も少なくない。選考対象となる自薦・他薦の候補作品に見落としがないかどうか、を含め、広がる対象分野にしっかり目配りしていくことが、これからの課題だろう。(JASTJ理事 柴田鉄治)

インドネシア科学ジャーナリスト会議設立

～スコープアジア事業の最終年度に成果～

インドネシア科学ジャーナリスト会議2015が8月29、30日の2日間にわたり、首都ジャカルタから約60キロ南の都市、ボゴールの国立森林研究開発センターで開催された。インドネシア科学ジャーナリスト会議（以下SISJ）の第一回会合であり、インドネシア全土から若い科学ジャーナリスト約60名と研究者約30名が集まった。

笹川平和財団による過去3年間のスコープアジア支援事業がSISJ誕生という成果につながった経緯から、同財団の林茉莉子さん、また東京会議開催などで運営を支援してきたJASTJから小出重幸会長、理事の瀧澤美奈子が参加した。

インドネシアに日本のJASTJに相当するSISJが設立されたことにより、今後JASTJとのいっそうの関係発展が期待される。

科学者と連携して社会問題をテーマに

プログラムはSISJのキックオフ会議にふさわしい内容だった。森林研究開発センターのHenri Bastaman氏、インドネシア学術会議のSangkot Marzuki会長による基調講演は、インドネシアを科学的な視点で俯瞰したもので、学術界から科学ジャーナリストへの期待のメッセージが寄せられた。

Sangkot Marzuki会長によれば、インドネシアは2045年に独立100周年を迎えるが、科学の重要性に対する認識が十分とはいえず、国家予算に占める科学技術予算は0.09%にすぎない（日本は2014年度で約3.7%）。2045年までの4つの挑戦として、①科学的知見に基づいた判断が行われる社会の創出、②食糧安全保障の確立、③新興感染症や環境の脆弱性にさらされる生態系への対処、④中産階級の成長の加



会議が開催されたボゴールの国立森林研究開発センター（撮影 瀧澤美奈子）

速を見込んだ対策を挙げた。

こうした課題意識のもと、医学者、地質学者、森林や湿地の環境保全の専門家から、インドネシアの公衆衛生政策や資源開発問題、森林破壊などの話題提供が行われ、社会的で複雑なテーマを科学ジャーナリストがどのように扱うべきかという議論が活発に行われた。

データジャーナリズムについても充実したプログラムが組まれ、定義、データの発見・分析方法、実例が示された。グーグル・インドネシアによる講演では、グーグルを使ってインターネット上から有益なデータを集めるための方法が紹介された。参加者たちはその場でスマホを使って試しながら、熱心に質問を重ねていた。

会議二日目の最後にはJASTJの講演セッションが行われた。小出会長から福島第一原発事故報道から学ぶべき科学ジャーナリズムへの教訓、瀧澤からはJASTJの事業内容について説明し、SISJの発展にエールを送って会議全体が無事終了した。

会議参加をふりかえって

インドネシアは1万3000あまりの島からなる世界最大の群島国家であり、3億人を超える人口、約300の民俗、500以上の言語、イスラム教を中心としたいくつかの宗教からなる多様性の国である。

秩序がないことが秩序であるかのような大渋滞に象徴される、混沌と情熱のエネルギーが充満する社会。その発展に重要な使命を果たそうと、国の隅々からやってきたジャーナリストたちは屈託のない笑顔浮かべ、目を輝かせていた。

（JASTJ理事 瀧澤美奈子）



インドネシア科学ジャーナリスト会議2015の第1回会合（2015.8.29）
（撮影 Melvinas Priandana）

ベトナム国内会合にJASTJから2人出席

ベトナムの科学ジャーナリスト協会創設に向けた国内会合が、「科学ジャーナリズム—スコープアジアからの学び」をテーマに9月25、26日、ハノイで開かれた。ベトナム各地から約50人が登録、約30人が実際に集まり、スキルアップのための講義を聴くとともに協会創設への課題などを議論した。JASTJからは引野肇副会長と筆者が参加して日本の経験を伝えた。

自国主体の国内初の会議を開催

世界科学ジャーナリスト連盟（WFSJ）がオーガナイズした3年間のスコープアジアプロジェクトは、笹川平和財団がスポンサーとなり、若手科学ジャーナリストの養成を通じアジア各国の自国語メディアにおける科学ジャーナリズムのパワーをあげることを目標とした。1、2年目はベトナム語、インドネシア語、英語の3つの言語グループごとに研修が展開され、3年目はソウルでの科学ジャーナリスト世界会議の機会を利用してデータジャーナリズムのトレーニングコースを実施。平行して、ベトナムとインドネシアでそれぞれの国の科学ジャーナリストが主体となって国内会合を開くことを要請した。世界連盟は黒衣に徹し、会合の企画運営は当事者たちに委ね、そこにJASTJから2人ずつスピーカーを送り込むという形になった。

社会主義国ベトナムでは、団体を勝手に作ることはできない。作るとすれば、すでにある国家公認組織の下部組織にするしかないという。国家公認組織として、ベトナムジャーナリスト協会（VJA）があり、これは22000人もの会員を抱え、立派なビルに居を構える。国内会合は、ハノイ繁華街から車で20分ほどのこのビルの会議室で開かれた。VJAは科学



2日目はたまたま筆者の誕生日で、花束贈呈のサプライズがあった。手渡しするのはVJA研修センター所長のハンさん。

ジャーナリスト協会の設立を歓迎する立場だが、9月の段階では設立に至っていなかった。国内会合を取り仕切ったブイ・ティエン・ズンさん（「Youth Daily」記者、スコープアジアのメンター）によると、資金と人材が課題だということだった。

多くのプログラムに熱心な議論

会合には、笹川平和財団の小柳順一氏も参加、開会式でVJA研修センター所長のディン・ティー・トゥイ・ハン氏に続いて挨拶に立ち、2013年から始まったスコープアジアプロジェクトを丁寧に振り返り、成果をたたえた。

引野氏と筆者は、「論争を報道する—福島原発事故のケーススタディ」と「協会をつくる—JASTJの経験」の2つのセッションで30分ずつ講演した。ベトナムテレビ研修センターで働くトラン・タイ・ハーさんが通訳を務め、講演も質疑応答もスムーズに進んだ。

1日半のプログラムは盛りだくさんで、新聞社幹部による「科学ジャーナリズムの役割」、ホーチミン市の子ども病院の医師による「流行病報道への注文」という教育的講演があったほか、スコープ参加者たちが次々とスピーカーを務めて「スコープアジアの成果」「科学記事の探し方」「データジャーナリズム」「良い科学ジャーナリズム、悪い科学ジャーナリズム」「協会をつくる—ベトナムの場合」などをテーマに議論を盛り上げた。

協会設立の記念大会にならなかったのはやや心残りだが、スコープ出身者の活躍を見る貴重な機会になった。（JASTJ副会長 高橋真理子）



ベトナム国内会合の記念写真

（撮影 小柳順一氏）

14年目の科学ジャーナリスト塾が始まる ＝塾生の作品をホームページで紹介＝

JASTJの活動の柱の1つであり、今年14年目を迎えた科学ジャーナリスト塾は、10月21日に開講した。塾生を募集し始めたのが9月末と迫った時期にもかかわらず、ホームページや口コミを通して情報をキャッチした意欲ある19人が応募。実習指導を伴う塾としては、互いに顔と名前が分かるちょうどよい規模でのスタートとなった。11月末までに3回の開催を重ね、提出した原稿の内容や講師の話題提供に塾生が熱心に論議を交わすなど、順調な滑り出しだ。

動機を伝え合う

集まった塾生の年齢や職業、立場はさまざまだ。脳科学や地球環境、生物、情報、知財などの研究者・大学院学生をはじめ、民間企業の開発部門社員、弁護士、公務員、医療ライター、フリーランスライターなど、同じ「科学を伝える」こととはいえ、多様な分野で幅広い年齢層からなる。

「科学的な知識の普及に携わる職に就きたい」と京都から深夜バスで毎回通う大学院生もいる。原発報道での科学的データの伝え方を問う12年目の現役記者も。さらには出産を前に「妊娠・出産」のサイエンスフィクションを書きたいと参加した女性もいる。

開講日に塾生は、それぞれの参加動機を紹介し合った。その日の塾を終えて塾生から「会場に来る前はちょっぴり不安だったが、多様なバックグラウンドのある皆さんのそれぞれの思いを聞いて、わくわくしてきました」といった声が寄せられた。

話題提供と演習を交互に

「体験を未来に生かす」がテーマの今期は、新しい世代に伝えることを意識したプログラムである。第12期の「科学報道の失敗体験に学ぶ」の延長線上にあるが、戦後70年を生きた世代の先輩記者の体験に学びながら、現代の科学ジャーナリズムの課題に応えたいという願いがある。

1985年に起きた日航機墜落事故の原因をまとめた北村行孝さん（東京農大教授、元読売新聞論説委員）の「歴史を記録する—科学ジャーナリストのもう一つの役割」（11月4日）は、格好の話題提供になった。「30年経って関係者がようやく口を開いてくれるようになった」と、一つのテーマを追う意味を伝えた内容だった。

塾生がこの話をどう受け止めたかは、JASTJのホー



塾生の原稿を読み合う演習風景（11月18日）

（撮影 都丸亜希子）

ムページの「塾」のコーナーで読むことができる。30年前には生まれていない世代が多く、事件が「歴史」になっている。3月までに、南極報道、アポロ取材での体験を振り返りつつ、温暖化報道や福島原発の現地報道という現代のテーマにつなぐ予定だ。

計10回の半年間に、話題提供と実践的な演習を交互に組み合わせているのも今期の特徴だ。11月18日には「記事/報告文」の指導を高橋真理子さん（朝日新聞編集委員）が担当。「私の受けた作文教育」というテーマで提出された塾生のレポートを皆で批評し合った。

卒業生が指導する体制

塾生が書いた原稿や感想文を互いに見る。グループディスカッションで意見を出し合う。記者の鉄則は、「現場に行く」、「人と会う」、つまり「足で書く」とよく言われるが、この塾では「冷や汗をかきながら書く、読んでもらって恥をかく。それが文章上達の極意です」と声掛けしている。

塾生のレポートは文章アドバイザー（浅羽雅晴、漆原次郎、小出重幸、瀧澤美奈子、高木鞆生、高橋真理子、武部俊一、引野肇の6氏）が読み、コメントし、添削することになっている。そして光る文章は、漆原Web編集長がホームページに掲載する。そのルールを確立したことも初めてのことで。

現在の塾はJASTJの関係者がボランティア精神で支えている。サポーターや事務局も、そして重要な役割を果たしてくれているのが塾のOB・OGで、新しい世代が塾そのものを担うようになってきた。一般会員も、時として見学に来て話題提供者の講義を聞いたり、カンパ応援をしてくれたりする。とてもいい雰囲気になっている。（JASTJ理事、塾長・佐藤年緒）

わが国の資源管理と課題について ～水産庁資源管理推進室長 加藤雅丈氏に聞く～

持続可能な漁業への感心が高まるなか、国は資源管理をどのような考えで行っているのか。9月の月例会は過去10年あまり水産庁で資源管理や資源調査に携わってきた同庁資源管理推進室長の加藤雅丈氏に、日本の水産業の特徴と状況、資源管理の目的、手法、課題などについて話を聞いた。以下、月例会当日の内容をいくつか紹介したい。

国の資源管理の目的

はじめに水産庁が考える資源管理の目的が示された。加藤氏によれば、水産行政の目的は「量と質の両面で国民に安定的に水産資源を供給し、しかも産業として安定させること」である。したがって資源管理はそれ自体が目的ではなく手段である。

この考えのもと、たとえば資源が低位にあるもの（昔よりも大幅に減っているもの）は「高い」水準に戻すのではなく、「中位ぐらいに保ちながらも、安定供給を計る」ことを目指している。環境保護団体などは「中位以下の魚種が何%」と問題にしており、その違いが明らかになった。

資源の推移に対する認識

次に、資源の推移に関する水産庁の認識について。TAC（後述）で漁獲量が規制されている7種（サンマ、スケトウダラ、マサバ&ゴマサバ、マイワシ、マアジ、スルメイカ、ズワイガニ）は、変動の大きいサンマをのぞきTAC導入後に資源量が増加しており、一定の資源管理効果と評価できる。

しかし、これらをのぞいた残りの魚種の漁獲量に

ついては、昭和50年ごろの350万トンから現在約150万トンと、過去40年で4割にまで直線的に減少。魚種としては高級寿司ネタになるような沿岸のものが多く、これまで水産政策のなかであまり議論されてこなかったことを明かした。

さらに沿岸で顕著なのは、担い手の減少に歯止めがかからないことである。その結果、漁獲量の減少につながっているという面がある（担い手減少の原因は、燃油高騰、高齢化、資源量の先行き不安など複合的と考えられる）。沿岸の一人当たりの漁獲量は微増していることから、「沿岸では資源量も減っているが、担い手減少に比べてゆるやかと見ることができる」との解釈を示した。

資源管理政策の考え方

資源管理手法には①インプットコントロール（その漁場に入る漁業者を絞る）②テクニカルコントロール（漁具や漁法の種類を制限）③アウトプットコントロール（漁獲量を制限）がある。③の具体的方法としてTAC（漁獲可能量）で漁獲量を制限し、さらにIQ（個別漁獲割り当て）で先取り合戦を防ぐ。日本では①と②は古くから行われてきたし、自主的な取り組みも多い。しかし国の規制としてのTACは平成19年から現在までに7種、IQは3種とごく限られる。既存産業への影響への配慮からと考えられるが、動きの遅さがしばしば批判される。加藤氏は「TACやIQの手応えを感じているので、今後は対象を広げて行きたい」と述べた。さらに、平成29年3月に改訂される次期の水産基本計画にむけて、魚種ごとの資源管理政策の議論を行っていることを明らかにした。

月例会参加者からは、水産行政は魚種ごとの特性、漁業経営体の特性、既存産業を維持させる立場といった多面性をもつため把握が難しいなどの感想が聞こえてきた。（JASTJ理事 瀧澤美奈子）



講師の加藤雅丈さん（撮影 西野博喜）



当日の月例会の様子

（撮影 西野博喜）

子宮頸がんワクチン問題の現状

～薬害オンブズパースン会議メンバー 隈本邦彦氏に聞く～

予防接種法の一部改正により、2013年4月から子宮頸がんワクチンを含む3種の定期接種が開始された。わずか2ヶ月後に「体の広い範囲で持続する疼痛の副反応症例等について十分な情報提供ができない」との理由で、国は子宮頸がんワクチンの積極的接種勧奨の差し控えを決定した。NHK記者時代に厚生労働省を担当し、現在は民間の医薬品監視団体「薬害オンブズパースン会議」のメンバーでもある隈本さんに話を聞いた。

子宮頸がんは増えているのか

子宮頸がんの発生にはヒトパピローマウイルス（HPV）が関わっていると考えられている。HPV感染そのものはまれではなく、感染しても90%以上の場合、2年以内にウイルスは自然に排出するとされる。まれに数年から数十年にわたって持続的に感染した場合に、がんになることがあると報告され、WHOのデータでは、がん化に至ったのはHPV感染者の0.15%（10万人あたり150人）だという。

既存のデータから、隈本さんが作った2枚のグラフで説明した。1枚目は昭和50年からの子宮頸がんの罹患率、2枚目は昭和35年からの死亡率。下がっていた罹患率が平成7年ごろから上がっているが昭和50年代の約2/3である。この原因として「罹患率の上昇は発見率。検診率があがっているだけ」と指摘する。死亡率は、昭和35年では10万人あたり約5.5人だったが、昭和50年には2.5人に減少、その後は横ばいである。「この死亡率の低下は、HPVの感染者が減ったからではない」「何もしないで死亡率が下がっていることから、様々な要素が関連している

可能性が高い」とい、「この傾向は、ほとんどの先進国で同じである」と付け加えた。また、死亡率の年齢別のグラフから、「10代、20代の死亡率は誤差範囲に隠れてしまうほどである。『よく若い人が最近、亡くなっ



講話する隈本邦彦さん（撮影 西野博喜）

ている』というが、実際死んでいるのは他のがんと同様に60代以上」と隈本さんは語る。

WHOの死亡率のデータでは、東アフリカの34.5人を筆頭に、発展途上国が上位をしめているのが分かる。日本は欧米諸国より低い値である。日本産科婦人科学会理事長のコメント「日本で推奨の中止が続けば、十数年後には世界で日本だけが子宮頸がんになる人が増えている可能性がある」という新聞記事に、隈本さんは疑問を投げかけた。

ワクチンの必要性和安全性はいかに

HPVの遺伝子型は、100種類以上あるが、このうち、がん化するリスクが高いものは15種類だという。現在承認されているワクチンは、HPV16型、18型に対するものが主流。日本では、加えて52型、58型が多いと報告されるが、これらの異なる型に対して同じ効果が期待できるかはわかっていない。また、効果で確認されているのは、がんになる過程の細胞異常を予防することだという。

副作用による身体への影響はどうか。臨床試験による新たな慢性疾患の発生率と新たな自己免疫疾患の発生は10万人あたり、それぞれ3600～3800人と1100～1800人。死亡率に比べると桁違いの高さである。「すべてのワクチンには副作用がある。でも、許容範囲があり、『その国において、それらが必要であるかどうか』のバランスが大切」と強調した。

これまでMMRワクチンの副作用問題、製造不正問題を取材してきた隈本さん。その経験から、随所で、マスコミの報道の姿勢も問う講演であった。

（JASTJ会員 都丸亜希子）



熱心に聞き入る参加者たち

（撮影 西野博喜）

ノーベル賞受賞者・大村智さんのちょっといい話

2009年12月、女子美術大学と東京理科大学が「アートとサイエンスの融合」を目指して連携交流を締結した。その記念行事で筆者は初めて、大村智先生にお目にかかった。大村先生は長い間、女子美術大学の理事長もしていた。その異色の経歴も聞いていたが、お目にかかり話を聞いているうち、にわか大村先生の実録評伝を書こうと思いついた。

大いなる研究実績に圧倒される

「私の評伝を書くなら、生まれ故郷の山梨県韮崎市の生家に来て、どんなところで育ったのか見てほしい」と大村先生は言う。それで行ってみて驚いた。どこかで見た場所である。大村先生の生家と隣接して「武田乃郷 白山温泉」の看板を掲げた日帰り温泉施設がある。その温泉は、筆者が勤務していた東京理科大学知財専門職大学院・馬場研究室の夏の合宿のとき使っていた温泉だった。

それから大村先生の研究業績を詳しく取材を始めた。話を聞くたびに、大村先生のすごい業績が分かってきた。世界のトップクラスの研究者やノーベル賞受賞者との交流も深い。微生物由来の天然有機化合物の研究実績も、聞くたびに奥が深く幅の広さも分かってきた。オンコセルカ症（河川盲目症）の特効薬のイベルメクチンの発見によるメルク社からの220億円、そのほかからの30億円のロイヤルティもすごい。これだけ稼ぎ出した研究実績は間違いなくノーベル賞ものだと確信した。

地元への恩返し

大村先生には、研究者とは別の顔がある。女子美術大学の理事長を14年間もつとめたのは、美術への造詣が深く有名な絵画のコレクターでもあるからだ。生家と地続きにある白山温泉の隣には、私財を投じて韮崎大村美術館を創設した。当代一流の女流作家の作品が展示されている。それをすべて韮崎市に寄付した。

白山温泉の隣りに、「そば処 上小路」というおいしいお蕎麦屋さんがある。大村先生が必ず案内するお蕎麦屋さんだ。ごちそうになりながら「こんな場所にいいお蕎麦屋さんがありますね。誰がこんなと

ころに建てたのか・・・」という筆者のつぶやきに大村先生は「オーナーは私です」と言い、「隣の温泉も、私がオーナーです」と言う。

つまり生家の隣接地に美術館を建設し、温泉を掘り、お蕎麦屋さんを開店したのは、すべて大村先生だったのだ。美術館を見学し、帰りがけに温泉につかってお蕎麦を賞味する。この3点セットを準備したのは、故郷の人々に長年、お世話になったせめてもの恩返しだという。大村先生は、山梨科学アカデミーも創設し、約2億円の基金を投じている。「山梨の子供たちに科学心をはぐくみ、この地からビル・ゲイツのような独創性を発揮して世界を変えるような人物を輩出したい」という夢を語る。

青木繁にかけた思い

大村先生がノーベル賞を受賞したと発表された直後「房総半島の最南端にある海辺の小さなまちを喜びの電話やメールが駆け巡った」（東京新聞2015年11月2日付け）のである。この町に古民家があり、それを保存・改修する運動で大村先生が活動していたからだ。古民家は網元の家だった。裸の漁師たちがサメをかつぐ姿をえがいた「海の幸」の傑作を残しながら早逝した天才画家・青木繁は、網元の支援を受けてこの地でひと夏を過ごしたという。その話を聞いた大村先生が、古民家保存会に300万円を寄付してリーダーを引き受けた。

東京理科大学葛飾キャンパスがオープンしたとき、キャンパス内に記念碑として建てた青木繁の「わだつみのいるこの宮」の陶板の除幕式があった。わざわざ大村先生も儀式に参加して除幕の綱を引いた。筆者はそのころ、大村先生はゲストとして参加しているだけと思っていたが、今回、青木繁にかけた大村先生の思いを知って感動した。



青木繁の「わだつみのいるこの宮」の陶板の除幕式に参列した大村先生（右端）。真ん中が塚本桓世・理科大理事長（当時）、その左が藤嶋昭・理科大学長。（2013年3月）（撮影 馬場錬成）

（JASTJ会員 馬場錬成）

カクタス・コミュニケーションズの新たな試み

2015年も残すところあとわずか。来年度から施行される政府の「第5期科学技術基本計画」の完成も年末に向けて大詰めとなってきました。私たちカクタス・コミュニケーションズは、2013年から「日本の研究をもっと元気に、面白く」をモットーに、現場の研究者・科学技術に関わる実務の若手の方々と一緒に、サイエンストークス(www.sciencetalks.org)を運営してきました。昨年は第5期科学技術基本計画に現場の若手のインプットを入れてもらいたいという思いから、インターネットとイベントを通じて意見募集を行い、総合科学技術・イノベーション会議の勉強会で提言を発表させていただく機会を得ることができました。

新企画「サイエンス・ゲームチェンジャーズ」の立ち上げ

第5期科学技術基本計画の動向を見守りつつ、今年の中旬には「2020年サイエンス・ゲームチェンジャーズ」という新企画を立ち上げました。サイエンストークスはこれまでトークイベントや意見募集など、科学技術にまつわる様々な議論を行う場作りを中心に行ってきましたが、アイデアをいくら話し合っても、実践が伴わなければ未来は変わりません。そこで、一つでも二つでも、現場から実践して日本の科学技術のこれまでの慣習やルールを壊し、変化を起こす事例を作りたいと考えたのです。

その企画のキックオフとして9月7日にはすでに科学技術の分野で先駆的な活動を行っている研究者、ベンチャー企業の方々をお呼びしたトークイベントを開催。総合科学技術・イノベーション会議の原山優子議員をはじめ、青木崇行氏(カディンチェ



MCを務めるカクタス代表 湯浅誠 (撮影 サイエンストークス)

株式会社)、大澤幸生氏(東京大学工学部)、西田佳史氏(産業技術総合研究所)、柴藤亮介氏(株式会社エデュケーショナル・デザイン)、高橋祥子氏(株式会社ジーンクエスト)、石黒隆志氏(tsumikii プロジェクトマネージャー)と、ユニークな活動をされている方々にゲストとしてご登壇いただき、「あなたにとってのゲームチェンジとはなにか?」「どうしたらゲームチェンジを起こせるのか?」を語っていただきました。会場に来ていただいた皆様にとっても、インスピレーションを駆り立てる刺激的なイベントであったと思います。

3年目の壁を越えて

サイエンストークスの活動を開始して3年目。私たちは新しい科学技術メディアとして成長していくにあたり、「3年目の壁」の前に立たされていることを強く感じています。

2年間の活動の中で行ってきた議論を通じて、場作りや提案だけでなく、私たち自身が科学技術の議論の一端を担う第三者機関として機能し、変化の先駆けとなって具体的なアウトプットを行っていきたいという思いがあります。しかし一方で、「ことをおこす」ためには、これまでとは全く違うやり方が必要です。思いだけでなく、長期的で持続可能な計画が必要だと強く感じています。2015年はこの難しい局面を肌で経験した貴重な年となりました。完成に向かいつつある第5期科学技術基本計画を自分たち自身に重ねながら、今までとは違ったやりかたで、来年の計画を練っていこうと考えています。

(カクタス・コミュニケーションズ株式会社・サイエンストークス編集委員 加納 愛)



原山優子議員に質問するサイエンストークス委員 (撮影 サイエンストークス)

貧困の拡大で、日本の科学・技術はどうか？

ここ5年ほど、私の仕事は社会的弱者の問題、特に貧困問題が中心です。

貧困の影響を特に深刻に、かつ修復困難な形で受けてしまうのは、子どもたちです。貧困状態にある子どもたちは、学力その他にハンデを背負わされた状態で義務教育年齢に達します。小学校入学時に知っている語彙数に関する米国の調査には、一般世帯の子どもが平均3000語、一方で貧困移民世帯の子どもは平均800語というデータもあります。学力や知識の格差は学校教育の中で拡大し続け、生涯、収入・生活状況の格差をもたらし続けます。

日本には「子どもに自己責任なんか無い。大変な状況にある子どもには、何かしてあげたい」と考える数多くの大人がいます。それは大いなる希望です。しかし、容易に支援できる子どもたちは、むしろ恵まれている方です。

ある6歳男児は、見たところ4歳程度、話しぶりは3～4歳程度の感じでした。生まれながらの障害が

あったわけではありません。親は困難を抱えながら懸命に育児に取り組みましたが、自分の食もままならない中では限界がありました。絵にも文字にも未だ関心を持っていない男児は、目の前にある数冊の科学絵本を、積んだり投げたりして遊びます。読み聞かせを喜び、科学の話に目を輝かせることが可能な段階には未だ到達していません。私は遊びに付き合いながら、内心、「せめて小学校で十分な配慮を受けられますように」と願います。

これからの日本にはますます、科学・技術とその活用が必要です。しかし貧困の拡大は、科学・技術や専門家への理解を、生育と教育の機会に恵まれた人々の特権にします。そして科学・技術への無理解と不信の拡大をもたらします。

すべての子どもに、健やかな育ちと十分な学びの機会を保障することこそが、この不幸な分断を食い止める道です。(JASTJ会員 三輪佳子)

WEB編集長から

JASTJホームページをいつもご利用いただきありがとうございます。7月のホームページリニューアル以降、従来のおり月例会のお知らせなどをする他、ニュース的な記事を掲載しています。

■ 東南アジア会議報告、塾生執筆記事などを掲載

今回の『JASTJ News』でも記事がありますが、8月と9月にそれぞれインドネシアとベトナムで開催された科学ジャーナリスト国内会議に、JASTJ代表が2人ずつ参加したときの様子を、参加者で理事の瀧澤美奈子さんと高橋真理子さんがそれぞれ報告しています。会議の熱気や懇親ぶりが伝わってきます。写真も多くありますのでご覧ください。

また、10月から第14期が始まった科学ジャーナリスト塾のページも更新しています。今期の塾生募集案内を塾長で理事の佐藤年緒さんの用意により掲載。また、塾各回の課題作品を塾生たちが作り、優秀作などを掲載しています。塾での話題提供や議論の様子とともに、それを伝える塾生みなさんの“書きぶり”も、どうぞご覧ください。

■ WordPressでHPの運営・管理

ホームページを運営・管理するにはソフトウェアが必要です。いまのJASTJホームページでは「WordPress」というソフトウェアを使っています。WordPressは、ウェブサイトを開設・管理するためのプログラムが無償で提供され、ソフトウェアの改良などにだれもが参加することのできる「オープンソース」とよばれるソフトウェアです。

市販されている製品というわけではないので、使い勝手としては、かゆいところに手の届くところと、逆に手の届きにくいところと両方ありますが、ソフトウェアを使う分にはお金がかかりません。ウェブづくりに興味ある世界の人々が、テンプレートや追加機能をつぎつぎと積極的に提供することで、ウェブサイトをつくる環境がインターネット上に整っているのです。

今後も、ホームページの継続的な情報更新と内容の充実を目指してまいります。ご要望などありましたら、ぜひご連絡をいただければと思います。

(Web編集長 漆原次郎)

■ 新入会員の自己紹介

〈個人会員〉

● 平松 正顕 (国立天文台チリ観測所)

国立天文台チリ観測所助教・教育広報主任。博士(理学)。学位取得後、台湾での3年間のポストドク生活を経て2011年より現職。専門は電波天文学で、星の誕生過程を観測的に研究しています。またアルマ望遠鏡広報担当として執筆・取材対応などを行っています。

● 西岡 朝明 (デンカ株式会社)

化学系企業の技術者です。現在、特許出願業務等行っていますが、過去、事故処理や安全指導等行い、これらの事を纏めて、技術者倫理として大学の教育等を行ってきましたが、更に、科学技術が社会に与える影響等を学習して行かなければならないと考えています。

● 内田 友希恵 (株式会社テクロス)

国内外での循環器領域の学術集会を取材し、WEBサイトや情報誌から最新情報を発信しています。より多くの方に作成記事を読んでいただき、本領域の発展に貢献できればと考えています。

● 高山 由香 (電気通信大学)

科学が情熱の対象としたのは80年代。テレビの向こうでDr.セーガンが紡ぐ温かな物語は、格別のロマンでした。ITの発展を見越してエンジニアになりましたが、科学の魅力を伝えることこそ本望と思い、進路転向しました。

会員の BOOKS

新刊紹介

「なりたい人」になるための41のやり方

窪田良 (サンマーク出版・税別1500円・2015年8月発行)

慶應医学部卒の著者は、研究者として緑内障原因遺伝子を発見、その後、虎の門病院にて眼科執刀医として勤務。治療法のない眼疾患の治療法を研究するために渡米し、2002年にシアトルの自宅地下室でバイオベンチャーを起業。自社開発の技術により網膜だけに作用する化合物を発見し、世界で初めて飲み薬というアプローチで失明疾患治療の実現を目指す。現在、米国で大規模臨床試験を行う。対象疾患は、世界で1億3千万人が患う加齢黄斑変性。世界から失明をなくすためにさまざまなアプローチで挑戦する著者が価値ある失敗から成功を導くノウハウを綴った。(JASTJ会員 柏野裕美)



■ お知らせ

● 事務所が移転しました

日本科学技術ジャーナリスト会議 (JASTJ) の事務所が2015年12月から、渋谷に移転します。これまでお世話になっていた科学技術国際交流センター (JISTEC) が秋葉原へ移転することとなり、JASTJも移転せざるを得ない状況となりました。JISTECの皆様には、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

新しい事務所は、渋谷のNHK西門の向かい側、株式会社スタジオエルの一室をお借りすることになり、所在地・郵便物等の送付先は以下のとおりです。

〒150-0047

東京都渋谷区神山町5-8 株式会社スタジオエル内
日本科学技術ジャーナリスト会議

なお、新しい電話番号は070-1448-8800となります。FAXを送信したい場合は、お手数ですが上記の番号にあらかじめお問い合わせください。事務局の電子メール (hello@jastj.jp) に変更はありません。

● 20周年記念出版『科学を伝える—失敗に学ぶ科学ジャーナリズム』

かねてよりお知らせしておりましたとおり、JASTJの設立20周年を記念した書籍『科学を伝える—失敗に学ぶ科学ジャーナリズム』(1,500円+税)がJDC出版より刊行されました。それぞれの執筆者が自らの失敗から反省したこと、さらにそこから何を教訓とし、これからの科学ジャーナリズムの発展のためにどうすればいい



のか、具体例を示しながら述べたものです。ぜひお読みいただき、ご感想をお寄せください。なお、本書の編集には会員の徳田剛氏と鳥山大氏の多大な協力を得ました。

また、会員のみなさまは本書を定価の20%引きでご購入いただけます。ご希望の方は冊数と送付先を明記の上、hello@jastj.jp までお知らせください。折り返し代金のお支払方法等をお知らせいたします。

編集後記

▶2015年ノーベル賞で大村智さん(生理学・医学賞)と梶田隆章さん(物理学賞)の2名の日本人が受賞した。これまで日本人24人が受賞しているが、11名が物理学、7名が化学、3名が生理・医学、2名が文学賞、1名が平和賞となり圧倒的に科学系が多い。この傾向が将来にわたって継続されるかは疑問も残る。科学立国としての国策を強化しないと将来危ぶまれると感じるのは、私だけではないはず。(威)

編集・発行

 **日本科学技術ジャーナリスト会議**
Japanese Association of Science
& Technology Journalists (JASTJ)

〒150-0047 東京都渋谷区神山町5-8 株式会社スタジオエル内
電話：070-1448-8800 Email：hello@jastj.jp
会 長／小出重幸 事務局長／藤田貢崇
編集長／高木勲生、山本威一郎